

Title	「平家物語」の構成論にむけて
Author(s)	美濃部, 重克
Citation	大阪大学古代・中世文学研究会会報. 1985, 2, p. 3-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67230
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大きな問題を取り上げる。わずか数枚では無茶なはなしかもしれないが、私の意図にはこれくらい分量がかえって都合がよい。私は『平家物語』の構成について考えたいのだが、その目論見のためには、私案の骨子をスケッチ風の縮図にして示しておくのが便宜だと思ふからである。その大略は先学がさまざまの趣旨のもとに言及されてきた範囲をさして越えるものではないが、私は構成の問題を考察の中心に据えて、まとめてみようと考えているのである。

『平家物語』が複雑な形成過程を持つことは周知のことであり、原態としては現存の諸本のテキスト（作品としての表現世界）の枠を離れた形（「治承物語」）を想定する説までが存在する。そして現存の諸本のひとつひとつが『平家物語』の形成の歴史をそれぞれの形で抱え込んでいる。テキストの組成をなす章段の素姓は一樣ではないし、表現には一回的かつ過程的なものも含まれるとみななければなるまい。そこに構成を論じる際の困難さが存している。

私は、①現存の諸本の示すテキストの枠組み（十二巻本で言えば巻一から巻十二および灌頂巻を含む）の中で、②組成の素姓や新古の議論はひとまず措いて、ひいては成立過程の問題は捨象して、③諸本ごとに、④巻立て、章段立てそれに本文の表現の面で現在のままのものではなくて、その下敷きとなつていてと思われるテキスト（理論的にはその系統の祖本と仮定されるものテキスト）を想定して、『平家物語』の構成を考えてみようと思ふ。考察の対象を単純化することで、全体像を掴むことをめざすわけなのだが、その前

提には『平家物語』が歴史記事や説話の緩い集合体ではなくて、緊密な統合性を持った作品として構成されているとする作品鑑賞の立場と見通しとがある。

従来、構成の問題が正面に据えられなかつた理由はいろいろあると思ふ。その大きな理由について推測すると、この作品の語り物としての性格を重視する観点から、物語が部分としての章段が積み重なることによつて膨らんでゆき、それが作品として成長したとするような成立過程についての認識が強いこと。語り物としての平家の享受は、章段が独立しての場合が多く、『平家物語』を考える際も部分に解体し、全体像は部分の累積とされがちなこと。作品の本質をテキストが流動し成長する動的な側面の上にあると考えることから、構成という固定的な枠組みの機能は副次的であると考えられること。『平家物語』のテキストは、前述したように組成の性格とその成立、テキストへの取り込みの新古が一樣ではなく、本文の表現にも通過的なものが含まれていて、テキストの全体を確定的でかつ均一なものとして対象化できないと考えられること、などが掲げられよう。そうした認識が、テキスト研究の主流を原態、古態ないし成立過程についての議論やそれに向けての構想論の方面に向かわせてきたのだらう。

しかし、こと構想に關しても、たとえば山田孝雄氏の三巻本原態説や諸先学の年代記的な形式への注目、あるいは時枝誠記氏が提示されたような読みの試みなど、『平家物語』全体の構成論に繋がる研究の歴史もある。それに富倉徳次郎氏が『平家物語全注釈』において、幾つかの章段について付された構成上の意味についての注記のように、具体的に参考になるものもある。

さて私は、灌頂巻を立てる諸本のテキストからまず論じるつもりでいる。そのテキストには構成を示す形

式面での指標は、灌頂巻を除いてほとんどない。巻立ては、山田氏の説を疑問として時枝氏が述べられたとおり、構成を知る指標としてはなり得ないし、章段立ては演奏の便宜から出たものよりであり、それに拠ることはできない。しかも章段立ては表現を決定する上で構成よりも優位にあるようで、現存のテキストにあっては、全体の構成を知ることがかりは表現の下に埋もれてしまっている。それ故、構成は発掘を要するものであり、私はその手段をテキストの分析的読みに求めようと考えている。次ぎに構成上の大きな段落を便宜的に現在の本文の上で示すが、それは本来その位置にあったはずだという意味での指摘になる。

以上、前置きに終始したが、最後に大きな段落の位置についての私案を示しておこう。

私は灌頂巻を立てる諸本のテキストが、五つの部分から構成されていると考える。仮に命名してそれを示せば次のとおりである。

- ①物語の開幕に先立って示される部分で、主題を提示するところの序章部、
- ②物語の幕開きの部分で、主題部にさきだつての導入部、
- ③主題を具体的に展開させる主題部、
- ④物語の閉幕に向かって主題部を形式的な終焉に導く終結部、
- ⑤物語の閉幕の後に置かれて、主題を完結させる後章部、

以上の五部である。

その段落を、仮に岩波の古典大系の頁と行とで示すと、序章部の終わりは一〇七頁の後から二行目。以下の編年的な展開の形式とは違って、系譜を骨格として叙述を展開してある。導入部の終わりは一二二頁の三行目。永曆応保(169-169)から嘉応三(177)年までの十年近くの記事が一〇数頁で示される。主題部への

導入となるその時期の事件が大まかに辿られているのである。主題部の終わりは確定が難しい。問題となる辺りで六代の物語が本末体をなしている、編年的な叙述の形式を崩しているからである。しかし主題部が治承元(1171)年から五(1181)年および寿永二(1183)から元暦二(1185)の八年間の出来事を編年的骨格の下に語るものであることは明らかである。終結部は巻十二の終わりまで。六代の物語を中心としている。後章部は灌頂巻で、救済の主題を中心とした後日談である。

以上、私案の結論だけを大まかに示したが、それぞれについては問題の所在を明らかにしながら詳論しなければならぬまい。私は現在、序章部についての論を用意しているところである。

(南山大学)